醉夢樓隨筆

秋の植物（二）

川崎正悦

△秋海棠

秋海棠は支那の原産だけに真に唐めいた花である。桜貝で作つた造花の様であり、そのピンク色はあどけないようだがあまり陽の当らない所に小首をかしげて咲いているので、何やら物思はしげな花である。露伴の「花のいろいろ」に「……北に向きたる小さき書斎の窓の下などに此花の咲きて、緑の苔の厚う閉ぢたる……」とあるように秋海棠はあまり陽光の当らない北側を好む。

私は秋海棠の花を見ると藤村を想う『遠き門出の記念として君が御手にまゐらす。朝夕培ひしこの草に愈ふ思ひを汲ませたまふや』「この節子の書き残した言葉が岸本の気に成つた。何となくその根つくと、つかないとが、これから先の２人の生命に関係でもあるかのように思われて成らなかつた。試みに堀出して見ると、毛髪でも生えたように気味の悪い秋海棠の黒ずんだ根が４つとも土の中から転つて出て来た。」これは藤村の「新生」の終りの文章である。節子が遠く台湾の伯父の許に旅立つて行く時岸本からの多くの手紙や写真と共に秋海棠も送つたのであつた。それを岸本は２人の子供を相手に根を深く埋め直して、やがてやつて来る霜にもいたまないようにした、というのである。云うまでもない小説の岸本は藤村自身のことである。それから幾秋を藤村はこの秋海棠の花をどんなにか切ない思いで眺めた事であろう。秋海棠を藤村に送つた節子は此花に断腸花と云う異名のあることを知つてか知らずか……

又秋海棠の花を見ると子規を想う、子規が死ぬ６日前の９月１４日の朝、口述して虚子の筆記した「９月１４日の朝」と云う文章がある。それには「……時は６時を過ぎた位であるが、ぼんやりと曇つた空は少しの風も無い甚だ静かな景色である。窓の前に１間半の高さにかけた竹の棚には葭簀が３枚許り載せてあつて、其東側から登りかけて居る絲瓜は10本程のやつが皆痛せてしまつて、まだ棚の上迄は得取りつかずに居る。花も２、３輪しか咲いていない。正面には女郎花が１番高く咲いて、鶏頭はそれよりも少し低く５、６本散らばつて居る。秋海棠は尚衰えずに其梢を見せて居る。余は病気になつて以来今朝程安かな頭を持つて静かに庭を眺めた事は無い……」子規は秋海棠を好み

秋海棠朝顔の花は飽きやすき

秋海棠に向ける病の寝床かな

秋海棠に鋏をあてること勿れ

などとも詠んでいる。此の朝も子規はつくづくとまだ衰えぬ秋海棠を眺めたのである。また和歌にも

我が昔よく見て知りし金杉の

いも屋の庭の秋海棠の花

などがあつて子規が如何に秋海棠を愛したかが伺われる。シユウカイドウは大和本草に「寛永年間中華より初めて長崎に来る。それより以前は本邦になし。花の色海棠に似たり。故に名づく。」とある。シユウカイドウは單性花で雌雄同株、花冠は４弁花の様であるが広い２片が蕚で狭い方の２片が花弁である。葉腋にはよくムカゴが出来る。初秋になると私は貴船神社の境内にひそやかに咲く秋海棠を想う。

△石榴

石榴は花よりも実の植物である。松崎直枝氏が趣味の樹木に「秋雨頻りに注ぎ木々の梢漸くまばらならんとし、庭前の珠榴破れて紅玉をのぜかしむる時、天下の秋を此実に眺める事が出来る。」と書いて居るが真に同感である。猶続けて「……秋天の柿、元より悪くはないが柿よりも其趣きに深みがある。色に変化がある。形に凹凸がある。味に甘酸の度があり、朱珠透明にして其集合亦粗なるが如くして密。密なれども間を隔つる薄膜がある。蓋し垂帳裡中に佳人を覗うの趣きがないでもない。木の実数あれどもかく迄透明、不純ならぬものが他にあるであろうか。既に１果を机上に置きて文をやるべく思いを練るによい。食うに適する人は君子のみ。心澄み行い清き人の粗衣すれども垢つかず、陋屋なれども雑無たらざる所に適す。」と松崎氏は石榴を讃えて止まない。益々同感である。松崎氏は石榴を食うに適する人は君子のみと云つているが千利休は茶の菓子として秀吉に出している。天正１８年９月１３日の朝、秀吉と薬師院と拓左京の３人を招じた時、菓子に、ざくろ、焼栗とあり、同月の２１日、小早川隆景を招いた時も菓子に、焼栗、ざくろとある。利休はしばしば石榴を茶菓子に用いたらしい。君子でなくても一世の英雄秀吉も石榴を食べたであろう。今日から思えば石榴の実などを菓子とは、と驚くのであるが砂糖を我国に伝えたのは「孝謙天皇の天平

盛宝6年唐僧、鑑真来朝して蔗苗を伝ふも播殖せずと或書に見えたれども詳ならず、享保12年将軍吉宗甘蔗苗を琉球より取寄せ薩摩の人落合孫右衛門を召して之を浜及吹上の園中に試植せしむ。元文5年紀伊の人安田長兵衛始めて甘蔗を植え翌年始めて砂糖を製す。宝暦13年平賀源内物類品隲6巻を著し人参培養法、甘蔗培養並に製造法を附録す。和製砂糖は天明の饑饉までは世間の需用少かりしが同年奥羽に於て此物の飢を助くるの大なることを実験せしより收支相償ふに至り漸次製産を増加せりと云ふ」(植物渡来考)

とあるから秀吉時代には砂糖を使つた菓子など出来ていなかつたのだから致し方もない。然し俳人太祇は

喰はねども石榴興ある形かな

と詠じているし、仏説鬼子母神の伝説では、石榴は人肉の味がすると云うと石榴は、益々茶味とは縁遠いものになる。石榴の漢名は安石榴である。それは支那の張騫(或本には張賽)が孝武帝の元狩6年西域に作し、その帰途塗林安石国に立寄り、石榴の美しい花を初めて見て、之を本国に持帰つたので、時の人は之を安石榴花と呼んだ(植物と伝説)とある。石榴に就いては次ぎの様な面白い話がある。これは先年芦屋の某氏から聞いたのであるが、その人が或秋の朝庭の石榴の木の下に行つて見ると、数箇の実が落ちているので不思議に思い注意して樹上を見ると椰子蟹があの強い螯で果実の細枝を摘んでいた。それは其の人が汽船に乗つていたので生きた椰子蟹を南洋からブリキ罐に入れて持帰つていたのであるが括つてあつた針金が弱かつたので、何時の間にかその罐から抜け出て椰子がない為め手頃の石榴の実を摘んだものだと解つて失笑を禁じ得なかつたという。ザクロは石榴の音の転訛、原産地は小亜細亜である。樹皮及び根皮を剝取乾燥したものを石榴皮(局方)と云つて條虫駆除薬とするが、樹皮及根皮にはペレチエリン、イソペレチエリン、メチルペレチエリン等のアルカイロドを含み、ペレチエリンの中毒は最初脊髄の興奮性亢進を来し、次で呼吸及び運動麻痺を起すから使用するには細心の注意を要する。民間、扁桃腺炎或は咽喉加答児に石榴の実1個を水1、2合を以て煎じた汁で含嗽し、又口臭を除くにも用いる。(邦産薬用植物)

△ 木　　犀

風呂屋の帰りなど町中で香うてくる木犀の薫りもよく、田舎の陽当のよい農家の庭に咲き満ちたのもよい。古い仏像などあるお寺に、ほのかに香うのは猶ゆかしい。木犀のない国に育つた私は毎年この香いをかぐ秋を楽しみにしている。始めてこの甘い香いを嗅いだのは、神奈川県橘村の某寺に寄寓していた時で、大正4年9月23日の日記に「始めて木犀の香いをかぐ」と書きつけてある。その寺の住職が木犀の花が散り初めたら樹下に新聞紙を敷きつめたので、どうするんですかと問うたら、「此花を干して置いて、煎じて飲むとお経を読む時声がよく出ますので。」と答えた。こうした事が広く行われているか否かは知らない。「木犀は支那の原産で1名巖桂とも云い木犀類の総称であるが我邦では單に木犀と云えば銀木犀(漢名銀桂)の事で、黄花の方は金木犀(漢名丹桂)と呼ぶ」(牧野日本植物図鑑)私の好きなのは此金木犀の方である。金木犀も銀木犀も、雌雄異株で我国で栽培しているものは、皆雄株ばかりであるから結実しない。1種ウスギモクセイ(金桂)には種子が出来る。木犀の花付きの悪い時は石灰を肥料として与えるとよい。木犀はあまり香が高いと云つて嫌う人もある。幸田露伴も「爛言」の1節に「甘く芳はしき香も悪しからず、花の黄金色なせるも地にこぼれて後は見ておもむき無きにあらず。たゞ餘りに香の強きのみぞ、世を遁れたる操高き人の餘りに多く敎詠みたるん如く、却つて少し口惜きかたもあるやうに思はると書いている。

△ 芋

いやじやいやじやと畑の芋は
　かぶり振りふり子が出来た

と云う俗謡がある、此芋は里芋の事である。昔は單に芋と云えば里芋を指したので、漢名は青芋、日本の古名はウモと呼んだ。万葉には巻の16に宇毛と出ている。

蓮葉者(ハチスバワ)　如是許曾有物(カクコソアルモノ)　意吉麻呂之(オキマロノ)
家在物者(イエナルモノワ)　宇毛乃葉爾有之(ウモノハニアラシ)

又山の芋に対して、家つ芋とも称えた。陰暦8月15夜を、芋名月とも云うのは、此頃芋が成熟する時節だからで、名月には必ず里芋を供える。金井紫雲氏の「蔬果と芸術」の中に芋に就いて種々面白い事柄が載せてある。その中の2、3を挙げて見ると「時鳥の初音を厠にて聞けば禍あり、芋畑にて聞けば福あり、故に時鳥の啼く頃には高貴の御厠には、芋を鉢に入れて置くとなり」(夏山雑談)又芋茎(イモガラ)にも、いろいろの効がある。昔「支那のある国に劉易という人があつた。ある日劉易は何心なく庭を歩いていると、蜂が1匹蜘蛛の巣に引懸つて居る、蜘蛛は得たりと糸を手繰つて蜂に近づくと蜂は必死となつてこれと闘ひ、鋭く蜘蛛を刺したので、クモは痛手に堪えず落ちてしまつた。すると下は芋畑で、芋の葉が茂つていた。クモはすぐにその茎を喰い破り、刺された処に当てると見る間に、痛みが去つたと見え、元気になつて何処かえ去つてしまつた。劉はこれを見て甚しく感じ入り、直ちに人に試みると悉く験があつた」私もその真似をして数

年前、生徒を連れて能勢妙見に昆虫採集に行つた時、生徒の1人が蜂に刺されたので早速近くの畑にあつた芋の葉を採んで試た処が2回で痛みが止つた。又芋茎は永く貯蔵も出来るので「加藤清正がこれを熊本城の壘として敷き込み万一に備えた」事も出ている。これは大楠公が千早城の籠城に大豆を沢山貯え置き、崩しにして、野菜の欠乏を防いだと云う事と思い合せると両名将の思慮深さに感心する。

又次ぎの様なユーモアもある。「文化13年、稀な旱魃があつて、人々はさまざまに神仏に祈願を籠め、神官に祈つて貰つた処その霊験があつてか、忽ち篠衝く雨が降り出したのでその骨折に酬いる為めとて、氏子の人々から長いすいきを贈つたら其神官が

これもまた御法(ミノリ)の雨の恵みかも
　　芋がらにさへすいきせらる

と詠んだと云う」（松屋筆記）

すいきは芋茎と書くが、これは植物学上では葉柄である。

徒然草には芋好きの盛親僧都の事が出ている。

『真乗院に盛親(ジョウ)僧都とてやんごとなき智者ありけり。いもがしらといふ好みて多く食ひけり。談義の座にても大きなる鉢にうづたかく盛りて膝もとに置きつゝ食ひながら書をも読みけり。頂ふことあるには7日27日など療治とて籠りゐて思ふやうに、良きいもがしらを選びて殊に多く食ひて萬づの病をいやしけり。人に食はすことなし、たゞ1人のみぞ食ひける。極めて貧しかりけるに、師匠死にざまに、錢2百貫と坊一つを譲りたりけるを、坊を百貫に売りて彼是3百疋をいもがしらのあしと定めて京なる人に預けおきて10貫づゝ取りよせて、いもがしらを乏しからずめしけるほどに、又ことやうに用ひることなくて、そのあし皆になりにけり。「3百貫のものを貧しき身にまうけてかくばかりひける、まことにあり難き道心者なり」とぞ人申しける』この盛親僧都などは古今に類なき芋好きと云えよう。又近代の人では常陸の牛久沼のほとりに住み、河童の絵を描くに妙を得ていた小川芋錢画伯も芋が好きで、此の徒然草の盛親僧都の故事と、親が貧しい為めに満足に勉強させて貰う餘裕もなく、新聞に絵を載せても下宿代も取れない始末だが、何とかして自分の描く絵がせめて芋を買う錢になればいゝがと云う気持から此の雅号を選んだとの事である。然し明治時代では或は、この芋はサツマイモではあるまいか、大正時代でも東京ではよくキヌカツギ（里芋の蒸したもの）も食べたが、明治時代の貧書生の常食としては薩摩藷であつたから。

△　龍　　膽

リンドウの鮮麗な紫色は、野に咲いても山にあつても実に美しい、広々とした青野ケ原の練兵場に教練に行つた頃には、秋は小笹原の中に露深く龍膽が咲いて真に美しく可憐であつた、青野ケ原には蟋の音もよく澄んでいた。

又六甲の裏山では小流溜ほとりに龍膽の咲く頃にはエナガの群が楽しげに飛んでいるのも見掛る。六甲の頂上附近ではカヤネズミの円い巣のほとりに咲いた龍膽も見たことがある。カヤネズミは廿日鼠位の大さでスヽキの根元や葉の間に頬白の巣に似て、もつと球形の巣を作る。カヤネズミはスヽキの葉に登つて、ちよつと尾を巻付けて止まつている姿は中々可愛いゝものである。清少納言は龍膽を枕草子の中に「刈萱、龍膽は枝ざしなどむつかしげなれど、この花皆霜がれはてたるにいと花やかなる色あひにてさしいでたるいとをかし。…と述べているが、いと花やかなる色あひは同感だが此地方では種々の植物が霜枯れはてない中に咲く。龍膽(リウタン)は漢名で和名のリンドウはリウタンの転訛である。龍膽とは熊膽即ち熊の膽嚢より更に苦いと云う意味であるとの事である。日本の古名は倭名類聚抄に途加奈(ニガナ)、衣夜美久佐(エヤミクサ)と出ている。エヤミはオコリ即ちマラリヤ病のことで播州辺ではリンドウのことを昔オコリオトシと呼んだとのことである。日本薬局法では健胃薬とすること周知の通りである。

△　絲　　瓜

世の中を何の絲瓜と思えども
　　ぶらりとしては暮されもせず

ヘチマのぶらりとして間のびのした処に中々俳味がある。明治俳壇の開拓者正岡子規を絲瓜仏と云うのは宣なる哉と思うが

絲瓜咲いて痰のつまりし仏かな
痰一斗絲瓜の水も間に合はず
をとゝいの絲瓜の水も取らざりき

此辭世とも云うべき絲瓜の3句に依つて、子規を絲瓜仏と云うのであるが、これらの句は死ぬ前日明治35年9月18日、画板に唐紙を貼付けたのを妹に持たせ、墨も人に含ませて貰つた筆を力の弱つた手に漸く持つて、1句書き終る毎に、投げる様に筆を捨てゝ、咳入つたと聞いては、ぶらりとして間の抜けた絲瓜も、厳粛な態度で見直さなければならない。これらの句でも分るように、子規居士は絲瓜を薬として用いて居たようである。

民間絲瓜水は鎮痰及び利尿薬とし、又化粧水としても用いられる事は周知の通りである。絲瓜水は硝石を含有すると云う。（邦産薬用植物）絲瓜の繊維は種々の用途に供し支那事変以前は多量に外国に輸出されていた。絲瓜は熱帯亘細亜の原産で、漢名は絲瓜の外に天絲瓜又は天羅とも云う。和名もヘチマの外にナガウリ、トウリなど呼ぶ地方もある。ヘチマの語原に就いては言海に「蛮語ならん」とあり。白井博士の植物渡来考に「日本にては多識篇に和名倍知麻とあるを始とす、物類称呼にヘチマと云う名はトウリより出でたり、其故はトウリのト字は、いろはのヘ字とチ字の間なればヘチの間と云う意なりとある。垢擦りなどにするあの繊維の多い果実に絲瓜の漢名が出来それが我邦で絲瓜と訓読されるようになつた。今でも信州ではイを畧してトウリと呼んでいる地方がある。すると物類

称呼の様な詮索も出来よう。又高知博物学会、博物会報第4号に、宇野双六氏は次の様な説を載せている。「土佐では食用になる瓜をマウリと呼び、非食用瓜をヘゴウリと云う。薩摩では絲瓜をナガウリと称し八百屋にも売つていて、油にいためて味噌和とし或は味噌汁の実として佳い。土佐でアチとかコチとか明瞭に定まらないものをヘチと云う。ヘチマは前述の通り若い時は食用とされマウリの仲間で、後にヘゴウリとなつて本筋から脱してヘチになるからヘチマウリである」と云うのである。これ又一説として面白い。私も若いのを味噌汁に入れて食べて見たが上皮の部分が筋ばつていけないが中は一寸夕顔の味がする。

△ 鵯　上　戸

和漢三才図会に「按するにその子赤く熟する時、鵯喜んで之を喙む故に俗鵯士戸と云ふ。又鵯も之を嗜む故に鵯の飯ともいふ」とあり、又改正月令博物筌にも白英一名鬼目といふ。但し白英は花につきての名なり、鬼目は実をいえり、又ツグミノヒネともいふ。ヒヨドリ好んで此実を喰ふ也」とあるから籠に飼つて居た鵯にも鵯にもやつて見たがどちらも1粒の実も食べなかつた。ヒヨドリジヨウゴは茄科の有毒植物であるが本草綱目に（頑熱、風熱、丹毒、寒熱、小児の結熱に煮汁を飲む」とあり、民間薬としては茎葉共に煎じた汁で漆瘡、シラクモ、疥癬、悪瘡等の患部を洗滌すれば有効であると云う。熱した果液、は凍傷に外用するし、又有毒植物であるが、痛風には服用するそうである。其有毒成分は洋産のものはズルカマリンで、溶血作用があると云われている。ヒヨドリジヨウゴに類似の植物が数種ある。

ヒヨドリジヨウゴ

茎葉共に軟毛がある。葉は三乃至五裂、花は白色、漿果は球形で紅熟。

マルバノホロシ

茎葉共に毛がない。葉は卵状披針形で分裂しない。花は紫色、漿果楕円形で赤熟。

ヤマホロシ

茎葉共に毛がない。葉は卵状披針形で下部のものは三裂、花は白色、果実はヒヨドリジヨウゴと同じ。

タカオホロシ

ヤマホロシに似ているが葉に歯芽縁がある。漿果は広楕円形である。

ヒヨドリジヨウゴの漢名は、従来蜀羊泉を当てゝある本が多いが、国訳本草綱目で、牧野博士は蜀羊泉は誤りで、白英が正しいと考定されている。

△ 曼　珠　沙　華

ヒガンバナが有毒植物であることは誰でも知つている。それで昔から人が注意したであろうし、又火の燃えたような赤さからも人の注意を引くので方言は実に多く50数種に及ぶ。ジゴクバナ、フジバカマ（播磨）ハミズハナミズ（加賀）イチヤニヨロリ（伊予）カラスノマクラ、カワカンジ（駿河）ケナシイモ、キツネバナ（美濃、出雲、備前）キツネノシリヌグイ（越前）等があり猶テクサリバナ（伊勢、播磨、能登）は有毒植物であることを現はし、キツネノヌイマツは火のような赤さを示している。その有毒成分はリコリン、リコレニン、セキサニン、プソイドリコリン、セキサノリン、リコラミン、ホモリコリン等である。中毒症状は嘔吐、下痢、痙攣、虚脱、呼吸麻痺等で甚しい時は死に至ることがある。同属シヨウキラン、ナツズイセンも同じく有毒である。然しヒガンバナの鱗茎から製したメリジンは皮下注射薬としてアメーバが赤痢及肺ジストマ治療に賞用される。ヒガンバナは沢山花が咲くが種子が出来ないのは種子無し西瓜と同じく3倍体だからと云われる。民間、此鱗茎とトウゴマの種子と混ぜて、擂つたものを紙にのばして、腎臓病や濕性肋膜炎などで水のたまつた時足の裏に貼るが中々よく効くと云う。太平洋戦争の前には時々安価なビスケツトを食べて中毒した記事が新聞に出たが、それはヒガンバナの澱粉をメリケン粉に混ぜたものだとの事であつた。私も戰時中澱粉不足の際ヒガンバナから取つた澱粉を葛湯の様にして恐る恐る食べて見たが中々結構であつた。ヒガンバナの分布は日本、支那及中央アジアであるが、日本では北は宮城県まで岩手県、青森県には産しないが私が八戸で培養して見たが年々露地でよく花が咲いた。

△ サ　ル　ナ　シ

サルナシは山地に生ずる落葉纏繞の植物であることは人のよく知る処である。秋稍球形の漿果が淡緑色に熟すれば、甘酸味で中々甘い、十和田湖から発する奥入瀬川の流域にはサルナシの木が多く、ネギヨウと称し、この太い幹を土瓶敷にして以前は売つていた。その辺には山葡萄も多いが、サルナシの実の方が甘いので土地の子供は殆ど山葡萄は食べないでサルナシばかり食べるとの事であつた。然し私の行つたのは昭和の初めの事で、現今はどうか分からない。此実で果実酒を造ると中々よいものが出来る。本物の猿酒も遠く及ばないだろうと思う。昭和15年の夏大台ケ原山に登つて大杉谷を下り桃木小屋に泊つた時、その崖下にサルナシの実が沢山なつていたが、8月の事とてまだ熟していなかつたのは残念であつた。

△ マ　ツ　ブ　サ

マツブサの実も酒に醸すと中々よいものが出来る。色も実に美しい、其実を食べるとやゝ松の香いがするので、和名は松房の意である。同属のチヨウセンゴミシ（漢名五味子）は本草綱目に（気を益し、顔逆上気、陰を強くし、男子の精を益す」とあるから近縁であるマツブサも多少そんな効があるかも知れない。マツブサやアケビの実はカケスの大好物であの鳥に見付つたら仲間か親子か知らないが数羽集つて来てすぐ食べて仕舞う。数年前までは、磨耶山の山門前で麻生と云う老人が、こんな木の実や薬草類を売つていた。